

# 手仕事だから安い世界 ——インド北東部アッサムの野蚕糸から

上羽陽子 民博人類文明誌研究部



エリ蚕糸による手織り風景。タテ糸は切れにくい工業製糸、ヨコ糸は手紡ぎ糸を用いている(2016年)

人が手で紡いだ手紡ぎ糸と、機械で紡いだ工業製糸。同種類の蚕の繭から紡がれた糸ではあるが、どちらの価格が高いのだろうか。日本での常識とは異なる基準で設定されるインドの絹糸の価格から、手仕事とは何かを考える。

## 野生の蚕

インド北東部アッサムでの出来事だ。「手紡ぎ糸よりも工業製糸が高いなんて」。一見するとどちらも均一な糸であるが、ここでは工業製糸の方が、よりまっすぐできない糸ということで手紡ぎ糸よりも高い価格で取引されている。調査地では、このような驚く出来事に会うことが多々あるが、これはわたしの手仕事への思い込みが引き起こすものである。

中国で古来より絹を生みだすために改良されてきた「お蚕さん(家蚕)」は知られているが、屋内飼養の家蚕に対する呼称である野生の蚕(野蚕)はなじみがないかもしれない。

家蚕と野蚕の大きな違いは、育つ場所だ。家蚕は長年の馴化の結果、野外では生存で

て自家用や販売用として用いられてきた。

## 手仕事品の価格設定

日本でも多くの手仕事を見る事ができるが、日本における手仕事品は、人件費が高いため、価格が高く奢侈品となりやすい。そのため日本では、手仕事という価値のあるものとしてとらえられることが多い。他方、インドの手仕事は、幅広い種類の原料が国内で入手可能であり、数多くの熟練工が活躍する一方で、熟練や経験を必要としない単純労働人口も豊富である。その結果、手仕事品といっても安価なものが現在でも多く存在している。冒頭で述べた手紡ぎ糸よりも工業製糸が高い理由は、エリ蚕の製糸を家内手工業的に安い賃金で女性が担ってきたためである。

細くて強度のある工業製糸は、手紡ぎ糸と比べると、製織時に切れにくい。そのた

エリ蚕とはどのような蚕か  
アッサムにのみ生息する野蚕の原型種ムガ蚕をはじめ、エリ蚕、タサル蚕と実用価値がある蚕種が生育するインドは、野蚕の宝庫として知られている。飼料樹の多さと、家内手工業的な小規模の生産形態が、野蚕生産から布作りまでを支えている。冒頭で述べた手紡ぎ糸と工業製糸はいずれもエリ蚕によるものである。エリ蚕は、野蚕のなかでも一風変わっている。家蚕よりも強健で成長が早く、人工的に開発された飼料にも対応することができるのだ。現在は、アッサムをはじめ中国やベトナムなどでも生産されている。

そんなエリ蚕にも欠点がある。通常、ひとつの繭から家蚕であれば約一五〇〇メートル、野蚕であれば約五〇〇〜六〇〇メートルの長い一本の生糸を得ることができ。しかし、エリ蚕は、「ボ力繭」とよばれる繭層が軟らかい繭となるため、煮繭したときに長い一本の生糸を得ることができない。そのため、木綿や羊毛のような短繊維と同様に、繊維を撚り合せて一本の糸に紡ぐ必要がある。

アッサムでは、この手紡ぎ作業に村落の女性たちが内職的に従事している。紡がれた糸は、手織りによ



エリ蚕は約3日間かけて繭糸を吐き続けて繭をつくる(2014年)



エリ蚕の手紡ぎ糸(上)と工業製糸(下)(2017年)



ムガ蚕の繭を煮沸して生糸を挽き出す(2016年)

め近年、アッサムではエリ蚕の工業製糸化の開発が進んでいる。つまり、機械を導入した方が、その初期投資費用を回収するために高価になってしまっているのである。

これをふまえて、日本の手芸の世界を見てみると、アマチュアが作り手であり、特別な技巧が凝らされているわけでもない手仕事品が高価格で販売されていることがある。これは、日本の労働賃金に鑑みて、作り手が費やした時間や手間を価格に落とし込んだ結果であろう。一方で、時間や手間隙を加味せず、次の手仕事品を作るための材料費が出ればよいと思えるような価格設定のものもある。作られた時間や手間を勘案し、それを価格に置き換えるといった市場経済に慣れてしまった視点からすると、やや不可思議な世界にも映る。手仕事とは何か、を考える根源的な問いが手芸にはあるのだ。